大学教育研究　三重大学授業研究交流誌　　2010，第18号，13－19頁

新入生が表現した「三重大学の魅力」

2009年度「４つの力」スタートアップセミナー プロジェクトの分析より

中川　正*

１．はじめに

大学教育改革を進めるためにも、魅力ある大学づくりを行うためにも、教育を受ける学生たちが、どのようにその大学を認識しているかを把握することは不可欠である。本稿は、2009年度入学の学生たちが「三重大学の魅力紹介」というテーマで作成したプレゼンテーションの分析を通して、本学学生たちの三重大学に対する評価の実態を把握することを目標とする。

このプレゼンテーションは、2009年度、共通教育において開始された、「4つの力」スタートアップセミナーの中で学生に与えられた課題の一部である。同セミナーは、新入生を対象として全学統一プログラムによって運営され、入学者の約8割となる1,085名が受講し、その99％が単位を取得した(1)。本学の教育目標である「4つの力」(2)の理解に焦点を置きつつ、大学での学習に必要なスタディスキルを獲得させるとともに、社会性を養いながら主体的な学習習慣を身につけさせることを目指している。そのために、一方的な講義を最小限にとどめ、4人を原則とするグループ（班）での話し合いを通して、教員が提示した「4つの力」にかかわる課題の解決を図れるようなPBL（問題発見解決型学習）を授業の根幹に据えた。

この授業の中で、各班に与えられた課題は、「高校生を聴衆と想定して三重大学の魅力を紹介する」というプレゼンテーションを行うことであった。そのために、第5回および第7～12回の授業の最後の20分程度が、班ごとの調査、分析、プレゼンテーション作成用の時間とされた。そして、第13～14回には、クラス内ではあるが、公開でその課題を発表し、互いにコメントをする訓練とした(3)。授業担当教員は、この課題の進行過程に沿って、問題発見を導く感性、課題に則した情報収集力、分析を吟味する批判的思考力、結果を発表するプレゼンテーションスキルなどを養う指導を行った。

課題を遂行すること自体が授業の目的ではなく、課題は「４つの力」理解やスタディスキルの獲得という目的のための手段であった。プレゼンテーションの完成度は極めて多様であったが、与えられた時間の制約の中で、課題を与えられた250班すべてが発表にまでこぎつけたことは、授業のねらいに沿った成果であったと評価される(4)。

この課題を遂行した250班中、人文学部は30、教育学部は5、医学部は48、工学部は101、生物資源学部は66であった（表１）。プロジェクトの情報源や出典を明記しているものは85(34.0％)にすぎない。出典としてホームページのURLを記載した発表は77(30.8％)であるが、内容から判断すると、半数程度の班がホームページを用いたと推測され、インターネットが学生にとって、最も身近な情報源であることがうかがえた。観察を行った班が119(47.6％)、パンフレットを情報源とした班は45(18.0％)あった。実際に聞き取りを行った班が56(22.4％)、アンケートを実施した班が38(15.2％)であり、限られた時間ではあったが、オリジナルデータを作成した班も存在した。

表１．学科別「三重大学の魅力紹介」を行ったグループ数

学　部	学　　科	グループ数
人　文	文化	13
	法律経済	17
教　育		5
医　学	医学	30
	看護	18
工　学	機械工学	19
	電気電子工学	20
	分子素材	20
	情報工学	10
	建築	10
	物理工学	11
	合同(分子・情報)	11
生物資源	資源循環	10
	生物圏生命科学	21
	共生環境	23
	合同(資源・生物圏)	12
合　計		250

＊　共通教育センター長

「三重大学の魅力」を考えるときに、どこと比較しての魅力なのかがポイントとなるが、比較の視点がある発表は51(20.4%)にすぎず、大多数の発表は何と比べての魅力であるか明示されていない。比較の視点としては、高校との比較が15(6.0%)、他大学との比較が28(11.2%)、学部間の比較が19(7.6%)である。

以下、同課題の成果として発表された「三重大学の魅力」を、環境・施設、教育・学生支援、研究・地域連携、学生生活の４点から分析し、明らかになった学生の三重大学像を、三重大学としてどのように役立てていくかに関する若干の提言を行う。

２．環境や施設に関する魅力

(1) 立地・属性・イメージ

三重大学の魅力として、国立大学であること（7班；2.8%)、総合大学であること（21班；6.0%）に言及する学生がいた（表２)。また、キーワード[5]として用いられている属性としては、広さ（18班；7.2%)、海(52班；20.8%)、植物（10班；4.0%)、動物（8班；3.2%）などがあり、海に隣接し、自然豊かな広大な敷地を持つ、国立総合大学であるというイメージがうかがえる。また、三重大学を表現することばとしては、「まったり」、「のんびり」、「優しい」などがあった。

表２．「三重大学の魅力紹介」に用いられたキーワード

キーワード	グループ数	割合（%）
環境	81	32.4
食堂・食事	55	22.0
海	52	20.8
自転車	33	13.2
クラブ・サークル	32	12.8
地域	31	12.4
エコバック	30	12.0
レジ袋削減	30	12.0
トイレ	27	10.8
交流	23	9.2
環境先進大学	21	8.4
生協	21	8.4
広い	18	7.2
総合大学	15	6.0
３R	13	5.2
国際	13	5.2
就職	13	5.2
アルバイト	10	4.0
植物	10	4.0
動物	8	3.2
国立	7	2.8
TOEIC	7	2.8

三重大学へのアクセスに関しては、ある医学科の班が、医学部が存在する国公立大学が所在する都市人口と、最寄り駅からの移動に要する時間を比較し、人口が少ない都市であるが、最寄り駅から徒歩で通学できる大学としての魅力を実証した。

法律経済学科の班は、「田舎大学なめんなよ！」というサブタイトルとともに、都会の大学と比較した三重大学の魅力を、「海がある」、「緑がある」、「土地がある」という3点から紹介した。また、医学科の別の班は、「癒しのみ・え・だ・い☆」というサブタイトルとともに、三重大学を取りまく鈴鹿山系、伊勢神宮、高田本山という「癒しの場」の存在を指摘した。さらに、三重大学内にあふれる緑、三重大学に隣接する海と魚介類、キャンパス内にいる動物などが、三重大学を「癒しの大学」としていると表現した。

三重大学のイメージにかかわる広報にかかわる報告には、学長ブログやオリジナル商品に関するものがあった。生物圏生命科学科の班は、「三重大Ｘプロジェクト～埋もれた三重大の魅力を探せ～」というタイトルで、生物資源学部生物圏生命科学科のパンフレットを分析し、「講座で学べる分野を見やすくする」、「歴史の紹介を最新の研究機器紹介に替える」、「勢水丸の図面よりも搭載機器の説明や研究内容の説明を加える」、「フィールドサイエンス実習をよりアピールする」、「学生生活を手助けする施設の紹介を分かりやすくする」など、学生の視点から具体的に提言した。

(2) 環境

三重大学の魅力として、最も多く用いられたキーワードは「環境」であった（81班；32.4%)。前述の、海や動植物の存在も、環境に含めて表現される場合もあったが、それよりも環境ISO推進室や環境ISO学生委員会などを中心として行われている環境に対する活動に関する報告が多かった。関連するキーワードとして、「環境先進大学」(21班；8.4%)、エコバック（30班；12.0%)、レジ袋削減（30班；12.0%)、3R（13班；5.2%）などが頻出する。また、「自転車」(33班；13.2%)も、放置自転車のリユースを、環境ISO学生委員会の取組の一環として取り上げたものが大多数である。「環境先進大学」として学内外の 3R（Reduce、Reuse、Recycle）活動」に取り組むという「三重大学環境基本方針」に則った記載が多く、学生が三重大学の特徴として、環境活動に着目したことがうかがえる。

生物圏生命科学科の班は、環境ISO学生委員会を取り上げたが、その動機として、「三重大学は環境先進大学としてISO14001を取得するなどの環境活動に積

極的である。それならば、学生による環境活動が行われているのも三重大学の魅力の一つではないか」と述べている。そのうえで、環境ISO学生委員会に実際に調査に行き、地域連携プロジェクトを中心に、情報を得た。さらに、７月４日(土)に行われた町屋海岸の清掃活動に、実際に参加し、その模様をスライドとともに紹介した。

(3) 学内施設

施設や設備に関しては、91班(36.4%)で言及しており、学生が三重大学の魅力を紹介するうえで、施設を用いやすい状況がうかがえる。具体的には、三重大学マップを用いて、三重大学内の建物を紹介したもの、5学部の建物を比較したもの、建築年数や耐震性などを調査したものなどがある。

施設に関して、最も学生の関心を集めた対象はトイレであり、27班(10.8%)が言及した。生物圏生命科学学科のある班は、「魅惑のトイレ〜すばらしき三重大学のトイレ〜」というタイトルで５学部の男性用トイレを実際に訪れて、調査を行っている。「なぜトイレなのか」と自ら問いかけ、「トイレがきれいであることは大学の清潔さ、管理のよさの象徴と言えると思います。つまり、大学生活の充実に繋がるわけです!!」と答えている。同時に、膝の悪い人にとって、「トイレ選びは死活問題である」とも述べている。調査の結果、班メンバーが、快適さ、芸術点、インパクトの３つの視点から45点満点で評価を行っている。その「俺ら的ランキング」によると、１位人文(41点)、２位教育(35点)と、最近改築やトイレ改修などを行った学部校舎のポイントが高くなっている。

建物以外では、４つの班が、学内の彫刻など、シンボルとなるモニュメントについて報告を行った。医学科のある班は、学問の神であるミネルバの梟（三重県師範学校から移築)、「石の老人」を表わすドルハルバン(済州大学より生物資源学部に贈呈)、闘病する患者への思いを込めた「愛のかたち」、５学部が支え合っていることを表現した「いつつのささえあうかたち」を取り上げ、「ひと」、「自然」、「５学部」、「歴史」のつながりを表現したモニュメントが、三重大学の魅力を表現していると述べた。

３．教育・学生支援に関する魅力

(1) 教育・学習

教育や学習自体をテーマとした報告は30(12.0%)である。学生の本分が学習であるとするならば、このテーマ数は、必ずしも多いとは言えない。学生にとって、教育は学生に精神的圧力を与える畏怖すべき対象であるがため、肯定的にとらえ難かったのかもしれない。あるいは、重大な関心事であるがために、“優れている”と評価する基準がことさら高くなってしまったのかもしれない。教育プログラムに関しては、三重大学で特徴的なPBLをキーワードとしている班が5(2.0%)、１年生に身近であるはずのTOEICは7(2.8%)、外国語は3(1.2%)にすぎなかった。

教育プログラムに関しては、キャリア教育や実践的なインターンシップ、セミナーなどを取り扱うものが目立った。たとえば、生物圏生命科学・資源循環学科合同クラスの班は、「三重大学で学べること」として、「４つの力」スタートアップセミナー、水産実験所・演習船・農場・演習林での体験演習、インターンシップ、PBLセミナーを挙げ、その中でインターンシップの実施の流れを中心に報告した。また、電気電子工学科の班は、三重大学が誇る３つの学びの柱として、キャリア教育、インターンシップ、e-learningを挙げた。

また、工学関係では、資格取得に対する関心も強い。機械工学科の班は、京都大学、大阪大学、大阪市立大学との間で、工学関連の取得可能資格を比較した。さらに、機械工学科の班は、技術系大学の質保証機関であるJABEEの認定について説明をした。

教育学部の班は、「三重大学授業の魅力」というタイトルで、学部を超えて提供される共通教育の特徴を紹介した。中でもPBLセミナーが、さまざまな学部の学生とのグループワークを通して、人間性とコミュニケーション力を獲得する上で効果的であると述べた。

学習環境として、附属図書館や総合情報処理センター等の学習支援施設、無線LANなどのネットワーク環境、Moodleをはじめとするe-learningシステム、自習室、教室、机、いす、教員スタッフなどが言及されている。たとえば、看護学科班は、附属図書館の歴史、利用方法、構成、貸し出し可能冊数、システムなどを紹介している。三重大学にしかない図書館の特徴として、津の藩校の資料の存在、MILAI、三重県郷土史データベース、歴史街道GISを挙げて説明し、三重大学図書館についての評価を、他学部や他大学の人々から聞き取り結果を報告した。

共生環境学科班は、ある教員から「三重大学では学内のいたるところでインターネットがつながる」と聞き、学内200か所を４人で分担してノート型コンピュータを持ってまわり、実験をした。その結果、校舎外ではつながらないところが予想外に多かったものの、学

生が集まる校舎内や、食堂、図書館、文化系サークルでは、ほとんど無線LANがつながることを発見した。オリジナルな調査結果として貴重である。

(2) 国際交流と留学

高校時代にはあまり体験できない国際交流や留学に関して、多くの報告が予想されたが、実際には国際交流を中心的なトピックとして扱った報告は9班(3.6%)にすぎなかった。また、「国際」という用語が用いられている報告も、13班(5.2%)のみであった。このテーマは、経験の有無の影響が大きいと考えられる。そのため、入学直後には取り上げ難かったのかもしれない。あるいは、「国際」への関心の度合いは人により多様であり、グループの構成員全員の賛同を得ることが難しかったのかもしれない。

文化学科のある班は、「三重大学の国際交流」というタイトルで、語学研修や留学先を示したうえで、体験者の声を拾い、三重大学で学ぶことのできる外国語を紹介した。また、3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムや国際インターンシップについて紹介し、その参加を通して、海外で同世代のネットワークができること、異文化社会で共存する力を獲得できること、自己表現の大切さを再認識できること、言語のスキルアップができることを述べている。また、医学科班は、医学部の海外臨床実習について説明し、海外研修を通して、臨床能力、語学能力、コミュニケーション力、異文化理解力、適応力、忍耐力を獲得できると述べている。

三重大学で学ぶ留学生についての報告もある。機械工学科班は、留学生の内訳を示したうえで、留学生と交流することができる場を紹介した。また、留学生に対しても、来日時期、目的、困ったこと、友だちの作り方について聞き取りを行った。

(3) 学生支援

三重大学が提供する学生支援には、学生総合支援センターや共通教育センターなど、学務部が関連するさまざまな部署が関わっている。たとえば、生物圏生命科学・資源循環学科合同クラス班は、「三重大学の情報源」というタイトルで、キャリア支援センター、学生なんでも相談室、ピアサポート、Moodle、数学なんでも相談室などを挙げている。

その中で、学生支援関係で、学生の関心が比較的高かったのは就職であり、13班(5.2%)が「就職」をキーワードとした報告を行っている。文化学科班は、三重大学のキャリア支援の3つの柱として、キャリア教育、インターンシップ、就職支援を挙げ、中でも「キャリア・ピアサポーター制度」を中核に据えたキャリア教育は、学内での位置づけにおいても、関連部局との連携においても、他大学に類を見ない体制であることをアピールしている。

学生にとって、学生生活に果たす生協の役割は大きい。キーワードに「生協」がある発表は21(8.4%)であるが、生協食堂などを加えるとはるかに多くなる。教育学部班は、「三重大のサポート」として、生協が主催する新入生歓迎企画、購買(翠陵店)、学食を挙げ、各々について説明している。また、情報工学科班は、「三重大学のサービス」として、食堂、翠陵店、レストラン、トラベルキャリアセンターという、生協が提供するサービスを紹介している。また、看護学科班は、翠陵店の人気商品として、おにぎり部門、パン部門、お菓子部門、プリン部門を紹介した。

4．研究・地域連携に関する魅力

(1) 研究

研究に関する報告は21(8.4%)存在し、とくに、工学部や生物資源学部に目立った。ただし、ある生物圏生命科学・資源循環合同クラス班が、電子顕微鏡施設、アイソトープ実験施設、環境保全センター、キャンパス・インキュベーター、リサーチセンターを「マニアックな三重大の施設」として紹介しているように、初年次生にとって、研究はそれほど身近な魅力としてはとらえられてはいないようである。

その中で、カレー、日本酒、梅酒など、三重大学のオリジナル商品にかかわる研究は、いくつかの報告を生んだ。また、生物資源学部が行うフィールドサイエンス実習に関係する三重大学農場や、演習林、勢水丸には関心が示され、中でも勢水丸に関する報告は3つあった。生物圏生命科学科班は、勢水丸誕生までの経緯、練習船を持つ国立大学、勢水丸の設備、勢水丸を通して行われる研究、実習概要などを紹介している。

また、三重大学内に1基存在する風車にかかわる報告もあった。物理工学科班は、風車に関連付けてタービンの効率化に関する基礎研究や、コンピュータによるシミュレーションや風洞実験などが行われていることを紹介した。

(2) 地域連携

「地域」をキーワードとする報告は、31（12.4%)、「交流」を含む報告は23(9.2%)あった。環境ISO活動

関係にかかわるものが多く、国際交流なども含まれているが、研究連携にかかわる報告もいくつか存在する。

医学科班は、三重大学の産官学連携について報告し、地域圏大学として共同研究実績を積み上げている三重大学の実績を報告している。その中で生み出された成果として、NECシステムテクノロジーと新エネルギー産業技術総合開発機構と共同開発したロボットソムリエ、地元の造り酒屋、三重大学の学生、津市観光振興課によって体験型観光商品として製造販売されている蔵人体験などを紹介した。

三重大学と地域との交流を扱った報告として、医学科班がある。彼らは、三重大学は地域の人たちも気軽に訪れる場所であることを強調し、町屋海岸を舞台とした交流イベント、「東海の自然歩け歩け大会」、「発見塾」などの公開講座、三重大学生が企画するFMラジオ番組や、三重大学の施設貸し出し、伊賀研究拠点や地域コミュニティー施設の存在を紹介している。

また、附属病院の地域への貢献について、医学科班は、三重大学付属病院が導入を予定しているドクターヘリについて、海外での状況、全国の運用状況などを調査したうえで、三重県における必要性について述べている。

5．学生生活に関する魅力

学生が「三重大学の魅力」として言及したトピックとしては、学生生活にかかわるものが125(50%)と半数に上る。医学科班は、大学での楽しみ方として、「友達と話すこと」、「食堂で昼ごはんを食べること」、「部活・サークル」が重要な要素であると述べているが、高校生に対して三重大学の魅力を紹介する上で、三重大学の個性以上に、大学生活一般に関して、高校生活からどのように変化するかということに関心が強いようである。

(1) 食事・食堂

学生生活に関する魅力として挙げられたトピックの中では、食堂や食事にかかわるものが55(22.0%)と、最も多い。「うまい！はやい！三重大学の学食」、「食道（堂）を極める！」、「いただきます！生協弁当」、「三重大学と周辺のグルメ」、「食堂　SHOCKどぉ？」、「グルメガイド around the MIU」、「学食を快適に利用する方法」、「大学生の食事」など、工夫を凝らしたタイトルがみられる。生協のメニューの人気ランキングを9班が報告しており、「何を食べるか」ということが関心事であることがうかがえる。また、大学周辺に関する関心は、「どこに食べに行くか」ということから広がることがあり、6班が大学周辺のグルメマップを作成している。

機械工学科班の学生たちは、三重大学学食のラーメンが、醤油、塩、味噌を問わず350円であり、安いと感じたために、他大学のラーメンの価格と比較した。それによると、三重大学学食のラーメンは、名古屋大学と等価ではあるが、岐阜大学では醤油ラーメンが250円、味噌ラーメンが280円となっており、九州大学では塩ラーメンが320円であることから、他大学と比べて、必ずしも安価なわけではないことを指摘している。同時に、味が違うために、一概な比較もできないことを述べたうえで、高校生へのメッセージとして、「学食ごときで大学を選ばないように!!」と述べている。

(2) 自転車

自転車を扱った発表は33(13.2%)あったが、そのうち25は、環境ISO学生委員会による放置自転車リユースにかかわるものであった。江戸橋駅から自転車通学を行う学生が多い三重大学ではあるが、同区間の通学の足としての魅力として自転車に言及している報告はない。ただ、自転車があるということによって、便利な生活ができる大学として位置づけられている報告はある。

医学科班は、自転車が三重大学生の足となっていることから、「快適な自転車生活」というタイトルで、自転車で行ける三重大学周辺の施設・店舗を紹介した。その中で、三重大学正門から各地点までの経路と所要時間を自転車で調査し、所要距離をネットで算定したうえで、信号待ちを最小限にした各施設へのアクセスを紹介した。

(3) クラブ・サークル

クラブ・サークルを扱った報告は33(13.2%)あった。三重大学におけるクラブ、サークル数が多いことと、加入率が高いことが、三重大学の魅力として述べられている。中でも、環境や海に関するサークルは、頻出している。また、三重大独自のサークルとして、大学に住む猫に不妊去勢手術を施し、里親の募集を行う「ねこサークル」が3つの発表を集めていることが注目される。

分子素材工学科と情報工学科の合同クラス班は、「海のサークルについて」というタイトルで、ダイビング・サークル、「かめっぷり」、ヨット部の調査を行っている。「かめっぷり」は、2000年に発足し、三重県の海岸に上陸・産卵するアカウミガメや、伊勢湾に生

息する小型の鯨類、スナメリの調査を行うサークルであるが、８つの班で紹介されている。

(4) その他

学生生活に関しては、学園祭に関する報告、人の結びつきが生まれやすい環境を扱った報告、趣味としての釣りを勧める報告など、学生生活の様々な側面が紹介されている。

三重大学付近の下宿状況に関しては、電気電子工学科班の報告がある。彼らがアンケートを実施した対象は13名だけではあるが、家賃 31,000～56,000円（平均42,500円）、リビングの広さ7～10畳、自転車による通学時間0.5～15分という結果を出し、下宿先の利点や欠点を列挙している。

アルバイトに関しての報告は、9班(3.6%)によって行われた。情報工学科班は、三重大学周辺のマクドナルド、サイゼリヤ、吾平、ブロンコビリー、タンタン麺などに聞き取りを行い、それぞれの店舗における三重大学学生数、時給、労働日数、労働時間などを調査し、その結果を報告した。

6.「三重大学の魅力」が訴えているもの ～結びにかえて～

これらの学生たちの報告は、若者の価値や視点をも取り入れて三重大学像を再構築する上で、重要な手掛かりを与えているように思われる。

(1) 学生に定着しているブランドの確立

学生が三重大学をアピールする上で、最も頻繁に用いられたキーワードが「環境」であった。全国で唯一海辺に立地する国立大学としての三重大学は、広大な緑あふれる敷地を持ち、人と生物が憩う「癒しの空間」として表現されている。その中で、環境ISO推進室や環境ISO学生委員会などの活動を通して、人と環境にやさしい教育、研究、社会活動が行われている。この環境ブランドを、さらに強固なものに確立していくことができる。

(2) 学生が発見した「魅力」要素の資源化

学生が指摘した「魅力」要素には、従来あまり強調されてきていないものがいくつか存在する。それらを資源として活用し、伸ばしていくことは、三重大学に新たな魅力を加える一助となるだろう。

地方中核都市であってしかもその中心部に近いことによる住みやすさ、最寄り駅が急行停車であってしかもアクセスが良いことなどは、より強調されてもよい。また、三重大学に散在するいくつかのモニュメントを、人と自然、現在と過去、三重と他地域、異なった専門をつなぐ表現であるとの解釈などは、バラバラにあった景観要素を一つのモチーフで有機的につなげる上で、有益な示唆を与えているのではないか。

また、学生は「研究」や「地域連携」などの抽象的概念を、農場、演習林、勢水丸、風車、三重大オリジナルグッズなど、目に見える具体的な事物に置き換えてとらえる傾向がある。今後、教育、研究、国際交流、地域連携などを、関連する景観要素や具体的な事物に結びつけて説明することが、意識づけを行う上で効果的であろう。

(3) 学生目線での学習プログラムや学内環境の整備

大学は、学内の整備を行う上で、学生の優先順位をより重視することができるだろう。学生にとって重大な関心事である食事やトイレなどを改善することは、学生生活の満足度向上に結びつくものと考えられる。

また、教育プログラムにおいても、キャリア教育や体験的学習、資格取得などが、学生の関心を引いている。これらはすでに三重大学の共通教育センターでも重点課題として取り上げており、三重大学の方針とも親和性が高い。大学としては現在の方針が適切であることを確認し、さらに推進させていくことができるだろう。

さらに、広報においても、学生目線からのコメントを求めることができる。生物資源学部学生が、広報用のパンフレットに対してコメントを加えていたが、そのような学生からの働きかけが恒常的にできるような仕掛けを作ることが有益であろう。

(4) 学生の視点を学習・研究に導く工夫

今回の報告では、学生にとって本来中心的関心事となるべき学習や研究に関する言及は少なかった。大学に入学したばかりであるために、大学における学習や研究をどのように行うかに関して、明確なイメージが持てないということも、背景の一つであろう。そうであるとすれば、大学として、学生をできるだけ速やかに、学習・研究志向に導くための仕掛けづくりが重要であろう。たとえば、現在推進しているPBLをさらに浸透させること、また、キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムなどを用いて、体験型学習をさらに整備することなどの工夫をすることが考えられる。さらに、実際に研究に携わっている人々への聞き取りを

「４つの力」スタートアップセミナーの課題とすることによって、１年前期という早い段階で、研究や研究者に対する見方を変えさせることができるかもしれない。同セミナーの継続的改善が、学生を学習・研究志向に導く有益な手段となるものと思われる。

注

(1) 2009年度において、 医学部、工学部、生物資源学部では必修科目として、人文学部と教育学部では選択科目として開講した（医学部看護学科においては、形式的には選択科目となっているが、実質的には必修科目としての履修指導が行われた)。なお、2010年度においては、人文学部を除く４学部で必修科目となっている。

(2) 三重大学第一期中期目標・中期計画期間（2004～2009年度）において、教育目標として掲げた「４つの力」は、「感じる力」、「考える力」、「生きる力」およびその基盤となる「コミュニケーション力」であるとされている。2010年度からの第二期においては、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、およびその総合力としての「生きる力」となった。

(3) 「三重大学の魅力紹介」というテーマは、学生にとって身近な素材であること、および三重大学に対する知識を能動的に獲得させること、三重大学への帰属意識を養うことなどが考慮されて、決定された。

(4) 人文学部法律経済学科の３クラス中１クラスにおいては、実験授業として別テーマのプロジェクトを遂行したため、今回の報告対象からは除外した。

(5) 複数のグループが使用し、三重大学の魅力に関連していると判断される用語を「キーワード」として抽出し、分析の手掛りとした。